

文芸部門 鳳賞は傳田くん(法3) 懸賞論文と文芸作品コンクール表彰式



▲審査員の先生方(前列)と受賞者

「平成15年度懸賞論文・文芸作品コンクール」(学生部主催)の入賞者が発表され、文芸部門の鳳賞は傳田崇博くん(法3、作品名『一時間だけ降る雪』)が受賞した(論文部門の鳳賞は該当なし)。

11月25日、生田キャンパスで表彰式が行われ、池本正純学生部長から入賞者18人に賞状、賞金、育友会からの記念品が贈られた。

池本学生部長は「文章を書くことで自分の新たな才能に気づいた人もいると思うが、今後も研さんを積んでほしい。年々、応募作品が減少しているのが残念だ。受賞作はすべて活字になる貴重な機会なので、積極的に挑戦してほしい」と話した。(作品集は2月に学生部から発行予定)。続いて作品一点一点の講評が述べられ、論文部門について前田和實商学部助教授は「飛びぬけた作品はなかったが、全体的に出来は良く、特に優秀賞の4作品は甲乙つけがたいものだった」と論評した。

文芸部門を担当した柘植光彦文学部教授は「今年の作品は最近の流行からか、性、暴力や、携帯電話・メールなどをテーマにしたものが多かった。鳳賞に輝いた傳田くんの作品は未来を舞台としたファンタジー小説で、文章の構成に破綻がなく、表現力に優れた作品だった」と評した。今年の応募総数は40編(論文部門16編、文芸部門24編)だった。

【ニュース専修12月号9面】

第2回専大ベンチャービジネスコンテスト 鳳賞に水島さん(ネット情報2)

昨年の倍以上、78組が応募



▲池本学生部長(中央)と鳳賞の水島さん(右)、TEO賞の長門さん(左)



▲講評する審査委員の先生方

第2回専大ベンチャービジネスコンテスト(学生部主催)のプレゼンテーション大会が11月3日、生田キャンパスで行われ、水島奏子さん(ネット情報2)が最優秀の鳳賞を獲得した。

今年のコンテストには78組(昨年36組)が応募、1次審査を通過した11組(うち10組がネットワーク情報学部所属)は、本学教員のほか、アクシブドットコム取締役会長・尾関茂雄氏(平元法)、NCネットワーク代表取締役社長・内原康雄氏(昭63経営)らベンチャービジネスの第一線で活躍するOBをはじめとする外部審査委員の前で、持ち時間をフルに使ってプレゼンテーションを行った。質疑応答では、鋭い質問に苦しみながらも精一杯答える学生に審査委員から実現化のための具体的なアドバイスや温かい応援のことばが贈られた。

司書を目指している鳳賞・水島さんのプランは『インターネット上で自由に創作物を発表できるサイト』。活字離れの若者に本を読んでほしい—と目的がビジネスよりも社会貢献にある点、調査の綿密さ、プレゼンテーションの巧みさなどが高い評価を得た。

「同世代の人が書いたものを気軽に読むにはどうしたらいいか、と考え始めました。膨大な資料や調査結果の効果的な見せ方に苦労しましたが、この賞を励みに日常生活の中からさまざまなアイデアを出せるよう、視野を広げていきます」と喜びを話してくれた。水島さんには来年1月の学生部長表彰時に20万円相当の海外旅行券が贈られる。懇親会を兼ねた表彰式では特別にTEO賞として永戸真理華さん(ネット情報2)さんの『オーダーメイドファッションビジネス』が選ばれ、朝日監査法人の木下洋氏から15万円相当の海外旅行券が贈られた(他の入賞者は別表のとおり)。

「気づき」の機会を今後も提供 —池本正純学生部長

今回のコンテストを含めた学生部のさまざまな取り組みについて池本正純学生部長は

「ベンチャービジネスコンテストは各審査員から、昨年よりもレベルアップしているとの評価を得た。身近な発想で、より実現化に近いプランが多かったように思う。学部の広がりがあったのが残念だったが、この大会がプレゼン能力・コミュニケーション能力を試す場としても有意義であることが再確認出来た。

ファンドマネージャーグランプリは来年度は育友会会員の方にも参加していただくと考えている。ご家庭での話題も増えるのではないだろうか。また、数字を競うのではなく、「投資分析レポート」の優秀作品への評価を高くすることにし、より客観的なデータを重視することにした。

学生たちは少しのきっかけで変わるパワーを秘めている。学生部では他のセクションとも協力しながら、彼らが『気づく』チャンスを今後も提供していきたい。」

と話した。

緑地帯「かくこと」をすすめる

夏が過ぎるとスポーツの秋、読書の秋等の言葉を聞くようになる。秋は気温が20度くらいで、スポーツや読書をするのに適している。スポーツをするのには自ら体を動かさなければならない。読書をするには他人の書いた物を読まなければならない。

読書の秋が終わって師走になると、大学は「試験の季節」になる。記述式試験では、文章の善し悪しが評点を左右する。常日ごろ書くことに親しんでいないと、よい文章を書くことはなかなか難しい。答案には「てにをは」がぜんぜん出来ていなくて、何を書いてあるか理解出来ないものがある。「てにをは」を正確に使うことで、自分の考えを読む人に明確に伝えることができる。

短い文章を書くことで自分の考え・感情を表現することは難しい。(例:俳句。福井県丸岡町主催の「日本一短い手紙」)。ある程度の長さの文章を書くことで、自分の考えを表現することから始めよう。

たとえば、論文を書くとなると、それなりの勉強をして、文章を作っていく。途中で不明な点、不正確な点に出くわすと、書物・資料等を調べて再び書き直す。これを繰り返すことで知識が深まり、論文が出来上がる。

知識を欠くことを自覚し、汗をかくことを厭わず、恥を掻くことを恐れず、文を書くことを続けられれば、それなりによい文章が書けるようになる。(学生部)

【ニュース専修12月号9面】